昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和五十五年二月十五日 発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

第三十二巻 第二号

（通第三六八号）

目次

善知識の恩……近角常観……(1)
信を行く旅人抄……池山栄吉……(5)
御一代記聞書抄（続・六）……井上善右ヱ門……(9)
自照日誌抄（18）……西元宗助……(12)
一道会の記……榊原徳草……(15)
念仏詩抄……木村無相……(20)
ともしび……花田正夫……(23)

善知識の恩

近角常観

歎異抄に曰く、親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなりと。

執事抄に曰く、又（本願寺聖人仰）のたまわく、是非しらず、邪正もわからぬこの身にて、小慈小悲もなけれども、名利に人師をこのむなり。往生浄土のためにはただ信心をさきとす、そのほかをかえりみざるなり。往生ほどの一大事凡夫のはかろうべきことにあらず、ひとすじに如来にまかせたてまつるべし。すべて凡夫にかぎらず、補処の弥勒菩薩を初めとして、仏智の不思議をはかろうべきにあらず、まして凡夫の浅智をや、かえすがえす如来の御ちかいにまかせたてまつるべきなり。これを他力に帰したる信心発得の行者というなりと。

噫、聖人は御自身において何等の価値をも認めたまわなんだ。「是非しらず、邪正もわかぬこの身なり、小慈小悲もなけれども、名利に人師をこのむなり」これ聖人九十年最後の御自白である。「念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をも、しりたるらんと、こころにくくおぼしめしておわしましてはんべらんは、おおきなるあやまりなりと」と。噫、聖人は何等の持物ももちたまわぬ。「他力真実のむねをあかせるもろもろの聖教は、本願を信じ念仏まうさば仏になる、そのほか何の学問かは往生の要なるべきや」、学問も名聞利養なり、人師も我慢勝他なり、我身として取るべきものもなく、残るは罪悪の塊である。かくのごとくあきれるより外に致し方のない我身である。愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑する、無慚無愧のこの身である。かくの如き凡愚底下の私に対して、下したまう所は、唯かの高き岸より与えたまう南無阿弥陀仏の綱一つである。汝一心正念にして直に来れ、我能く汝を護らん、すべて水火の難に堕せんことをおそれざれの招喚の声ばかりである。足の下は青ずみたる海である、燃えあがる火炎は

身を包まんとしつつある、綱の強きと弱きとをかえりみる余裕はない。喚声の何人たるかを詮索するいとまを持たぬ。五十二段の階級を漸次自力をもって歴劫修行の結果、単に一段をあますばかりの補処の弥勒菩薩すらも、なお五十六億七千万年の暁に達せずんば仏智不思議の岸上に手を達することあたわぬ、まして凡夫の浅智をや、いわんや地獄必定の我等をや。唯たのむところは如来誓願の喚声ばかりである、信ずるところは念仏の綱一つである。この綱を与えて下されたがよきひとである、この喚声を取次いで下されたが善知識である。我等は絶対に罪悪の塊である。救済は、絶対に知識の教である。

正信偈に、如来世に出興したまう所以は、唯弥陀の本願海をとかんとなり、五濁悪時の群生海、まさに如来如実の言を信ずべし、とのたまい。又、弘経の大士宗師等、無辺の極濁悪を拯済したまう、道俗時衆ともに心を同じうして唯この高僧の説を信ずべし、と仰せられたも是である。即ちよき人の仰せをこうむりて信ずるばかり、別の子細はない、ひとすじに如来にまかせたてまつるべきである。

歎異抄に曰く、念仏はまことに、浄土にうまるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり。たとい法然上人にすかされまいらせて念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずそうろう。

執持抄に曰く、さればわれとして浄土へまいるべしともまた地獄にゆくべしともさだむべからず。故聖人の仰せに、源空があらんところにゆかんとおもわるべしと、たしかにうけたまわりしうえは、たとい地獄なりとも、故聖人のわたらせたまうところへまいるべしとおもうべきなり、このたび善知識にあいたてまつらずは、われら凡夫かならず地獄におつべし。しかるにいま聖人の御化導にあずかりて弥陀の本願をきき、摂取不捨のことわりをむねにおさめ、生死のはなれがたきをはなれ、浄土のうまれ難きを一定と期すること、さらにわたくしのちからにあらず。たとい弥陀の仏智に帰して、念仏するが地獄の業たるをいつわりて往生浄土の業因ぞと聖人さずけたまうに、すかされまいらせて、われ地獄におつというとも、さらにくやしむおもいあるべからず、と。

浄土へ行くの、地獄へ落つるのと、善悪の二つを承知したつもりでいるのが大間違である。念仏は善であるから稱えるのでない、悪であるからというて止められるものでもない。よきかあしきか知らねども、善知識の仰せのままを信ずるばかりじゃ、否信ぜずには居られぬ、唯善知識のお伴をするばかりじゃ、火の中でも水の中でも、死罪でも、流罪でも、師のおいでになるところへ御伴をさしていただ

くのじゃ、自分の行くところへ来いと仰せ下さるのじゃ。如来は、汝一心正念にして直に来れ、と仰せられ、善知識は我と共に来れと導き下さる。如来の仰せのままが善知識の御言、善知識の御言あればこそ如来直々の御言がいただかれるのじゃ。

愚禿抄には、直は諸仏出世の直説をあらわさしめんと欲してなり、と仰せられ、略文類には、悲願の真利を顕わして如来の直説となしたまえりと仰せられた。形を見れば法然、詞を聞けば弥陀の直説、善知識というは阿弥陀仏に帰命せよといえる使なり。唯仰せを蒙りて信ずるほかに別の子細なきなりである。

歎異抄に曰く、そのゆえは自余の行をはげみて仏になるべかりける身が、念仏をまうして地獄にもおちてそうらはばこそすかされたてまつりてという後悔もそうらはめ、いずれの行もおよびがたき身なれば地獄は一定すみかぞかし

執持抄に曰く、そのゆえは明師にあいたてまつらでやみなましかば、決定悪道へゆくべかりつる身なるがゆえにとなり。しかるに善知識にすかされたてまつりて、悪道へゆかましかばひとりゆくべからず、師とともにおつべし。されば地獄なりというとも、故聖人のわたらせたまうところへまいらんとおもいかためたれば、善悪の生所わたくしのさだむるところにあらず、というなりと。これ自力をすてて他力に帰するすがたなり。

地獄必定の我等である、危篤の病人である、生死の苦海に沈みつつある我等である、我等は唯善知識に遇いたてまつりたるを喜ぶばかりである。善知識のお伴をするばかりである。

涅槃経に曰く、善男子、第一真実の善知識は所謂仏菩薩なり。世尊何をもっての故に、常に三種の善調御をもっての故なり。何等をか三とする。一者畢竟軟語、二者畢竟呵責、三者軟語呵責なり、この義をもって菩薩諸仏は即ちこれ真実の知識なり。また次に善男子、仏及び菩薩を大医となすが故に善知識と名く。何をもっての故に、病を知り、薬を知り、病に応じて薬を授くるが故に。乃至善男子たとえば船師の善く人を度するが故に大船師と名くるが如し、諸仏菩薩もまたまた是の如し、諸の衆生をして生死の大海を度せしむ、この義をもっての故に善知識と名くと。

実に我等が地獄必定の病を知りて、本願醍醐の妙薬を与えたまうのである。我等が生死大海に苦めるをあわれみたまいて、大願の船に乗じて運命を共にして、彼岸に渡して下さるのである。地獄必定の我等、苦海沈淪の我等、唯与えたまう薬を頂くばかりである、呼びかけたまう御声を信ずるばかりである。かくまでも我等の病をかねてしろしめすのである。仏かねてしろしめして煩悩具定の凡夫と仰せ

らるるのが是である。その仏の御心を伝えたまう聖人は、親鸞もこの不審ありつるに唯円房おなじこころにてありけりと仰せられるのである。いささかの所労（わずらい）のこともあれば死なんずるやらんと心細くおぼゆることも煩悩の所為なりと仰せ下さるのである。かくまでも我等の病を知ろしめして下さるのである。苦を知ろしめして下さるのである。信ぜざるを得ず、仰がざるを得ぬのである。

華厳経に曰く、汝善知識を念ぜよ、我を生むこと父母の如く、我を養うこと乳母の如く、菩提分を増長すること衆疾を医療するが如く、天の甘露をそそぐが如く、日の正道を示すがごとく、月の浄輪を転ずるごとしと。

実に善知識は父母なり、日月なり、無明長夜の灯炬なり、生死大海の船筏なりとは、聖覚法印の法然上人を歎ぜられた言である。

而して、上記の涅槃経も、華厳経も、親鸞聖人が教行信証に善知識の恩を渇仰せられた御文である。若し地獄必定の自覚なくば善知識の恩を知ることは出来ぬ。仏恩報謝の念なきや、同行善知識に親近せざるは雑修の失である。必定地獄に落つべかりける我等、この如来知識に遇いたてまつる、身を粉にしても報ずべきである、骨をくだきても謝すべきである。南無阿弥陀仏

みのりのうた　　盤珪国師

世にありて　世と遠ければ　世の中の人に見られで　ひとり住むかな

みな人のさとりとおもうさとりこそ　絵にかく餅をかきやあらそう

仁保の海や空も一つにうつりきて、浪より出づる月を見るかな　　湖上の月

達磨の絵をもとむる人に
我にある活ける祖師をばすておきて　外にもとむる紙の達磨を

春は花　秋は紅葉の色々も　みなそのままの法のことの葉

池水にうちむかいて
さしむかう心は清き水かがみ　よしあしうつるかげはとどめじ

信を行く旅人抄

池山栄吉

一体歎異抄は、いわば純金の塊(かたまり)みたようなもので、そのうちの一部を取ってみれば、全体がわかるので、歎異抄のどこにもかしこにも、歎異抄の全体が含まれているのです。だから一章でも、二章でも、何章でも、その章がわかれば、その味いは他の各章にも通ずるのです。各章の一部がわかった場合でも同じことです。この意味において『歎異抄のどこか』は、信仰徹底の手段として、何の不足もないのであります。繰返して申します。歎異抄は、全体を読まなくてはわからないものではない、また全体を読んでも必ずしもわかるものではない。要は、一点その精髄に浸透するかしないかにかかるのであります。

本抄の文句はすこぶる古典的でありますが、その内容はまことに生き生きとした新し味に充ちています。それは、古今を通じてかわらない不磨の現実性にもとづくからであります。

「そのゆえは罪悪深重、煩悩熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします」　（歎異抄第一章）

私は、本抄を拝読して、この文のところにいたるたんび、ああここが大本だなという感に打たれます。これこそ実に歎異抄一巻の核であり、骨子であります。

独り本抄一巻の核であり、骨子であるばかりでない、他力浄土の教え一般のそれであります。それはそのはずです。法蔵菩薩の目的、弥陀如来の御思召、即ち、本願がそれなのであります。

「弥陀の誓願の不思議」もこれから出た。「念仏まうさんとおもいたつこころ」もこれから出る。「摂取不捨の利益」も、「如来よりたまわりたる信心も」、「無碍の一道も、「非行非善」も、「無為をもって義と為す」も、「親鸞におきてはただ念仏して」も、「親鸞一人がためなりけり」も、いやしくも絶対他力そのもののあらわれである限り、一つとしてこれから生じたのでないものはありません。

そもそも本願とは、我身にまつわる罪業の重みに、迷いの苦海に沈淪(ちんりん)したまま、永劫に浮かび上る機会のない衆生(しゅじょう)を、悟りの境界に救い出してやりたい、救い出さずにはおくまい、という如来大悲の意思であり、力であります。

この意思であり、力である本願の働きで、罪悪深重、煩悩熾盛の衆生がたすかるのであります。

さて、この罪深重、煩悩熾盛の衆生とは一体だれのことか。単に言葉通りに解して、つみぶかく、まどいのさかんなひとびとのことだ、と自分に眼をつけないで、他人の方ばかりみている人は、この文を読んでもせいぜい対岸の火事を見る位の心地しかしないで、割合平気でいられましょう。それではまだまだ如来の御慈悲、本願のかたじけなさを肝銘することは出来ません。

ところで諸君はどうですか？罪悪深重、煩悩熾盛の実感がありますか。その自覚がないと、ピッタリ本願と出遭うことはできません。そうでないと、如来の御心と私共の心とはつながりません。自分の力でどうすることもできない自分であるとわかったところに本願が要る。絶対の他力が要る。それに気つかぬ人には、本願は猫に小判であります

ここで問題になってくるのが自分ということです。自分はどんなものであるか、自分の価値、能力はどうか。それについて深く考えもしないで、口に信仰だの、救済だのと云ってみたところで駄目です。信仰の話をききながら、右の耳からはいったことが、左の耳からつつぬけてゆくかのように、心にひびくところのないのは、つまり自分というものがよくつきとめられていないから、話が自然に自分に触れないで、聞き方がうわの空になる、耳にきいて、心にきかないという風になるからです。

ドイツの哲学者ニイチェは、「超人」のなかに云っています。「君がたは超人を信じるというのかね？けれども超人が何だね！君がたは私の信者だというがね、一体信者というものがなんだね！君がたは、君がたを探したことがなかったじゃないか、だのに私を見つけたんだ。いわゆるの信者というのがみんなそうなんだ。だから信仰というものがみな駄目なんだ」と。

「今時の道俗、己が分を思量せよ」と聖人は私共に注意を喚起されます。信仰は己を知るをもってはじまるのであります。己を知ることがいよいよ深ければ深いほど、絶対他力はますます己に近づいてき、それに従って、己のすが

たが層一層はっきりと見えてくる、そして己と他力とがピッタリ出遇って、函蓋相応したところが信仰の極致であり、ここにいたって初めて、己の何たる、他力の何たるが了解されるのであります。

今まで偶然にあるもののように思っていた絶対他力、換言すれば、弥陀、本願、念仏は、そうではなくて、罪悪深重、煩悩熾盛のこの自分をたすけんために存在するのであった、如来と自分とは、切っても切れない、離れようとて離れられない不可分的必然であると確信されて、この世からなる未曽有の天地がひらけてくるのが、絶対他力の信的生活であります。

ここで一つ試みに眼を仏界の方へ転じてみましょう。「煩悩の黒雲はやく晴れ、法性の覚月すみやかにあらわれて」という不生不滅の境地から「無明煩悩しげくして、塵数のごとく遍満す」る生死流転の闇の中をうろつく、われわれ衆生を眺めたとしたらどうでしょう。難波した船をみかけては、それに乗っている人々の溺死を坐視するには忍びない。無心に線路の上に遊んでいて、轟々と押し寄せる車の音にも驚かない頑是ない子供をみては、安全地帯に抱き出してやらずにはいられない。それが犬の子であっても見殺しには出来ない。我々自利を主とする人間ですらそうであります。いわんや悲智円満の仏においておやです。「苦悩の旧里」「火宅無常」の中から、我々衆生を救い出してやりたいというのが、仏の本意でないはずはありません。かの法華経の七喩の一として名高い、火宅のたとえ、火のまわった家の中に居ながら、危険の身にせまるのも知らず、やきつく病苦をいといもせず、てんでに好きな遊びに気をとられて脱れようとしない我が子達を、どうかして外に出させ、救いとげてやりたいと、とつおいつ工夫をこらす年老いた長者の焦慮もおもわれます。

さて仏となるには、仏となる種がなくてはならない。例えば仏となりうる直接の原因として六波羅密があります。布施・持戒・忍辱・精進・禅定・般若の六の行がそれであります。もしわれわれが独立してこれらの行を完全にやってゆくことが出来れば、だれのお世話にもならずに、ひとりでに仏となることが出来るでしょう。またたとえ全部はできなくても、その中を一つなり、半分なりが出来るならば、仏力の加護と相まって、漸次向上の地盤をきづき上げて、いつかは仏果に進むこともありましょう。よし菩薩の行とまでゆかずとも、せめて世間普通の道徳の一つである孝養、奉事師長といったようなことが満足に行えたら、それを種とし、縁として救い上げようと、てぐすねひいて待

ち構えている仏もないではないでしょう。

が、いかんせん、人はいざ私の如きは、布施持戒を行ぜんにはあまりに慳貪破戒であり、忍辱精進を行ずるとしてはあまりに瞋恚懈怠に過ぎ、またあまりに乱想であり、愚痴であって、禅定、般若を行ずるなど、とてもおもいもよらない。孝養父母、奉事師長なども、形の上ではいくらかごまかせるとしても、本当のところはとても出来ないと白状せざるを得ない。そこに仏に救い上げられるべく、髪一筋の手がかりさえも持合さない、縁なき衆生と申す外はありません。

ここに、私達のあるがままで、救って下さる仏もがな、と長歎息の外はないのに、この無理とも背理ともいいようのない、またもとより本気の沙汰で言うのでもない註文を、私どもの知らない前から、チャンと御自分の願望とせられ、「願もって力を成じ、力もって願を就じ」ちからとのぞみとぴったりかなって、寸分の狂いのないように、願力を成就されたのが私共の信仰の対象、阿弥陀仏でまします。

願力無窮にましませば
罪障深重もおもからず
仏智無辺にましませば
散乱放逸もすてられず

大悟の域に達したいという人間至高の理想が具体化し、人格化したのが仏であるように、衆生を済度したいという諸仏に通ずる理想が具体化し、人格化したのが阿弥陀仏であると申してよいと思います。実に阿弥陀仏こそ、釈尊も讃歎せられた通り「威神光明最尊第一」で、真に仏の中の仏と仰がれるのであります。

阿弥陀仏は、自分はこうして仏になった。お前がたも精出してこうなるがよいと、ただ成仏の範を示すだけの仏ではない。またアメリカあたりで、募金の際、所定の半分を募集せよ、あと半分は自分が出そうから、と約束する金満家と同様に、こちらの持合わす善根に力を添えようという仏でもないのです。何から何まで向うもちで、迎えとらずにはおかないと、うまずたゆまず此方に向って下さる仏であります。阿弥陀仏は無力な者にうってつけの仏であります、阿弥陀仏はこの私の仏なのであります。

御一代記聞書抄（続六）

心得たと思ふは心得ぬなり、心得ぬと思ふは心得たるなり、弥陀の御助あるべき事の尊さよと思ふが心得たるなり、少しも心得たると思うことはあるまじきことなり、と仰せられ候。されば口伝鈔にいわく「されば この機の上にたもつところの弥陀の佛智を募らんより他は凡夫いかでか往生の得分あるべきや」といへり。

（二一三条）

井上善右ヱ門

一

この条には知的理解と宗教的体験との別が鮮かに語られています。初めに先ず「心得たと思うは」とあるのは知的理解を指された言葉です。そしてそれを受けて「心得たと思ふは心得ぬなり」と言われています。「心得ぬなり」とは、本当に如来の大悲をいただいた信心ではないとまうされているのです。従ってここに「心得る」という言葉が二様に使い分けられていることを知ります。一つは解ったと知識として承知する状態をいい、一つは佛心に値遇して頭の下った心中を指しておられるのです。

私共人間は、知とか理解とかを初めから飛び越えて進むことが出来ません。殊に現代人はそうであります。ですから聞法が一たび理解という形で受け入れられることは、あながち否定される事ではありませんけれども、それを宗教的な魂の開明と混同し、大悲の領受である信心と取違えることは大きな誤りであります。理解というのは何等か知性を媒介として頷くことであり、対象しせしめて知ることです。信は直接に私の命にそそがれる大悲そのものに浴することであって、知による間接的な理解ではありません。

知的に追究して或る理解に達することはなお意味あることですが、それまでにも至らず、或る教えの事柄をデッテルでも貼ったように知識として受け取り、それで解った心得たと腰を据えてしまうのは悲しむべきことです。このよ

うな状態に滞ることを歎かれて五九条には「皆人のまことの信はさらになし、もの知り顔の風情にてこそ」と詠じられ、その意を尋ねた人に対して「もの知り顔とは我は心得たりと思ふがこの心なり」と戒められています。さらにまた御文章には「弥陀如来の本願の我等が為に相応したるたふとき程も身には覚えざる故に、いつも信心の一通りをばわれ心得顔の由にて、何事を聴聞するにもその事とばかり思ひて耳へも確々とも入らず、たゞ人真似ばかりの体たらくなりて見えたり」（二帖五通）と。まことに鋭いご指摘であります。我が描いた心の影に居すわっている姿を「われ心得顔の由にて」と云われ、何事を聴聞しても、ああその事なら知っていると聞き流してしまい、ただ信心の真似事をして日を暮らすことになるのは「本願の我等が為に相応したるたふとき程も身には覚えざる故に」と歎かれているのは、まことに切実な戒めであります。

二

人間は我が心で考え、我が意識で作るものは転々として渡り歩くものでありますが、どんなに立派に構築しても、畢竟それは作り物に過ぎません。作り物で心の闇は晴れないのであります「来て見れば浮世なりけりここもまた」といった趣きを脳裏の世界にも経験するものです。

どうにもならない計らいの行詰りに遭遇するということはたふといことです。真実がそこに私を導くのです。作り物が作り物であることを自ら暴露し、たより執じていた己れが崩れゆくとき、始めて真実が独り仰がれてきます。知解をもって心得たと思うていたことの空しさに目覚め、その空しさの外に何ものもない己れを、やるせない大悲が摂取してある尊さが仰がれてくる消息が「心得ぬと思うは心得たるなり」ともうされてある意であります。

それにつづいて「弥陀の御助けあるべき事の尊さよと思うが心得たるなり」といわれ、その外に我として「少しも心得たると思ふことはあるまじきことなり」といわれているのは、歎異抄に「たゞほれ〴〵と弥陀の御恩の深重なること常におもい出しまいらすべし」と語られ、「しかれば念仏も申され候、これ自然なり、わが計わざるを自然と申すなり」と唯円坊がその心中を述べているのと全く一つであります。己れが空しうなってたゞほれ〴〵と本願が仰がれ、本願が己れに入り満ちて念仏となって顕われる。それは即ち、佛徳が生活の源泉となって実践されることであります。

三

最後に口伝鈔が引用されていますが、それは同鈔の第四章に善悪二業について「善も欲しからず悪も恐れなし」と親鸞聖人がもうされたこころを述べるところに出ている言葉です。口伝鈔の文では「機の上にたもつところの佛智を募りとせんより他は……」とあるのを、今聞書では「募らんより他は」となっています。募るとは「広く求め勧める」意ですが、また転じて「ますます強くはげしくなる」意に用います。従って「募りをする」とはいよいよ強く力とする意と読むことが出来ましょう。それを「募らんより」と言い変えても同じであってただひたすらに佛智を力とするより外に往生の道はない、という意であります。

仏智を力にすることは己れがすたることです。それを「ゼロの自覚」と語っておられる人もあります。己れに執じて仏智を遮っていた、その己れが空しくなることと仏智の無限なる働きとは表裏して現われます。自己が無底の底に落ち込んで消えゆくとき、大悲真実の限りない深さ高さが仰がれ味われてきます。

無限というのは頭で考えているときは、たゞ量的な観念に過ぎませんが、それが生命体験となるとき果しない働きなって感じられます。たとえば如来の無量光が無辺光、無碍光、さらに転じて十二光となるのも仏徳が信の中に働かれる如実の実感であります。『行巻』に十住毘婆沙論を引用されるところに信力転増という言葉が現われています。無限の佛智が信の中に果しない徳となって転ずる様子が偲ばれるのです。「弥陀の仏智を募る」という言葉にそのような趣きを味わうことも出来ると思うのであります。

八木重吉詩集抄

「他人が
知ってくれぬ」って!?

ああ
だれか　未だかって
「自分」をすら
知った　者が　あろうか!?

自照日誌抄（18）

——聖人のご臨終のことなど——

西元宗助

かねがねお名前を承り、お書物も読んだことのある福地幸造氏と、お目にかかる機会にめぐまれた。

氏は半生を同和教育というか、部落解放教育に打込んでこられた、そして今も打込んでいられる神戸の高校教師。まずお会いして感じたこと。五十才台後半と承っていたのに、どうみても私と同年輩—七十才前後としか思えない。それほどご苦労がお顔にも身体（からだ）にも滲んでいられる。そして自分全体を相手に投げだしてしまったような無法さがおありなさる。それは私をして思わずペスタロッチ（スイス近代の大教育者）の肖像画を想い起こさせた。そういえば福地さんの著作「落第生教室」は、ペスタロッチの「シュタンツだより」に匹敵するほどのすさまじさがある。

実はこの福地さんと、旧知の宗正元氏（教学研究者）と三人で、親鸞聖人について語りあったが、そのときのことで心に残ったことの一つは、まず福地さんの「わたしが気も狂わんで、こうして生きておるということは、考えてみるとわたしが鈍感で、いや不真面目であるからで、まったくお恥かしいことで」という言葉であった。

ともかく福地さんは、このような苦闘のはて、共産党とも離れ、ようやく親鸞さんに親しむようになったと話されたが、殊に聖人の死にぎわのことに心ひかれたとおっしゃる。それは聖人のご臨終が、どうも〝高僧〟らしい立派なものではなくて、全く平凡な、いや、ひょっとすると多少お苦しみになりながら、この世を去られたふしがある。だからこそ一層の親しみの念を禁じえないと。

そのことは私も、かねかねひそかに感じていたこと。いま福地さんのおっしゃる推定の根拠を説明すると、こうなのである。

それは、いま残っている恵信尼公の娘、覚信尼あての第三のご書簡からして、そのように推測されうるのである。その問題の箇所を、前のお裏方の現代語訳（大谷嬉子著「恵信尼さま」）によって、左に紹介してみよう。

「なにはおいても、殿（聖人のこと）がお浄土にご往生遊ばされましたことは間違いなく、あらためて申すまでもございません」と、まず恵信尼は、自分の確信を最初に述べて、それを証明するように、自分の夫である聖人が若かりし日、六角堂にこもられて夢の中で聖徳太子のご文に接し、法然上人をたずねて「たとい悪道なりとも」と、難行を捨てて本願に帰せられた御入信のいきさつから、最後に、関東の地、下妻（しもつま）において、夫である聖人が、観音菩薩の化身にましますという夢をご覧になれたこと、しかしこれは事柄の性質上、今まで口外しなかった旨を前置きされたうえで、覚信尼に次のように諭していられるのである。

「それ以来、心の中では（聖人）を普通の人とは思わず、お仕えして参りました。あなたさまもこのようにお心得おきください。ですから、殿のご臨終がどのようであらせられましても、お浄土へのご往生は間違いないと堅く信じております云々」（傍点筆者）

これはいうまでもなく、父親鸞の臨終に立会った娘・覚信尼から、越後なる母恵信尼に父の臨終の有様を速報したことに対する恵信尼の返信なのである。

残念ながら、覚信尼の手紙は残っていないので、すべては推測の外はないが、しかし覚信尼の手紙が、父親鸞のご臨終がいわゆる五色の雲のたなびくような〝往生〟であったのでなく、傍目には全く平凡な、いやそれどころか多少お苦しみのあられたことさえも憶測させるもので、ともかく覚信尼は、父のこのような死にざまでは、その往生はいかがであろうと、一抹の懸念（けねん）があって、その不安を母に訴えたものであると推測しうる。

だからこそ、これにたいして、母恵信尼は、このように縷々として、しかも断乎として所信を述べて、殿のご臨終がどのようであれ、御往生は間違いないと、臨終往生ではなく、平生業成の宗旨を如実に明らかにされたのであろう。いずれにしても希有の御書簡であることが改めて思わしめられるのである。

年の瀬に、大宮通りの大谷家にお伺いする。久振りの歓談を終えて辞去いたそうとすると、思いがけなく「慈光」誌代三ケ年分と仰せになって金一封を過分にいただく。それに村上速水教授のご健康のことなどをお尋ねになっていられるところをみると、「慈光」誌に目を通していただいているようで、全く恐縮、感激いたしました。

最後に例によって、榎本榮一翁の詩を掲げさせていただく。榎本さん、有難うございます。

苦をたまわる

南無大悲の如来さまは
私を無限に
お育てくださるか
つぎつぎと苦をたまわるので
眠りこけておられず

元朝所感　　をさ・はるみ

よびこゑにこたへて道をとひゆかむ
七十四年の朝ぼらけかな

み名ここにありてひさしき旅なりき
老いらくの身にふかきおもひで

よくこなされたことば　　聚墨生

人々は好きなものを腹一杯食べた時、満腹感をよろこぶそれが数時間後には胃がカラッポになってくるが、その時に食べたものが、胃や腸から吸収されて、血となり、やがて肉になる。

よくこなされた言葉とは、その言葉が身についた時である。他人から教えられた借りものの言葉でなく、自分自身の言葉、肉体化した言葉である。

おらが国さのことば

旅人という詩に、田舎出の青年が都会に出てあちらこちらとさまようが、何処へ行っても〝よそびとだ。おらが国さの言葉が聞けぬ！〟といった箇処が忘れられぬ。

私も久振りに故郷の岡山に帰った時、電車が大阪をすぎ姫路に近づくと、岡山なまりの言葉が車中のあちこちから聞こえた時、何とも云えぬ心のあたたかみを覚え、一人一人に話をしたい心に一杯になった。生れて育てられた故郷の言葉は永い間故郷を離れた身にも、心底深く温存されていることに驚いた。念仏の味いも新しく知らされた。

一道會の記

榊原徳草

昭和五十四年十月二十八日午后一時から、故池山栄吉先生四十二回忌、故白井成允先生、故池山寿夫先生、故松本解雄先生、故向島諦宣先生等の追憶の法話会を開催いたしました。数日前から当日の天候を心配していましたが、週間予報では、よかったり、当日は雨となったりして、どうにもならぬことながら、当日は晴れてくれと願いながら心は騒ぐばかりでしたが、案外晴後曇でホッとしたことでした。毎年のように嫁いだ娘がお手伝いに孫をつれてきて、その孫が玄関の履物を数えて九十九あったと云いました。内玄関からも毎月例会の人々や親しい人々が二十人以上はあり、大変な参集でした。廃刊になった「自照誌」の人々も見えました。去年までは御出席になった故松本解雄先生の義妹の北川夏子さんは八月に御往生になり、又永年お手伝に来て貰った橋本スミエさんも亡くなられて、こうした身辺の親しい人々の死は、心の一隅にポカノと穴が明けられたようで愁然たる感にひたります。まことに一期 会の厳しさであります。

いつものように一時から仏前で阿弥陀経、池山先生の尊影に向って歎異抄を十章まで拝読し、毎年ながら「幸いに有縁の知識によらずんば、いかでか易行の一門に入ることを得んや」の一句には、涙で声がとだえてしまう。はかり知れないながい年月、種々に善巧方便の限りを尽して有縁の善知識を顕わし、その前に坐らせて下さる如来の大悲は謝しても謝しつくせぬご恩徳であります。

次いで私は次のような開会の言葉を述べました。

池山先生の「一心正念直来」のお話を私はかって顕道会館で拝聴したことがありますが、その時に、黒板に一心正念直来と書かれて、その直来のところには「これはこのように読んでいいでしょう」と云われて、「スグキテオクレヨ」と書かれました。そして一心正念、これを先生はどう訳されるだろうか、と息をのんで伺っていますと、先生は

「如来の大御心を拝しますれば」と仰言って「オネガヒダカラ」と振り仮名をつけられたんです。そして聴衆の方へ向き直り、演壇に両手をひろげて身を支えて「オネガヒダカラスグキテオクレヨ」と深々と頭を下げられました。

そう仰言ったとき、先生はそのまま如来であるという感がしまして、地の底から湧きあがるような静かなお念仏が会場に満ちたことを思い出します。こちらがもしも、一心正念になったとしても、眠っているときはなれません。口だけは言えても胸の内は動きづめ、だから私の方では「心を一つに正しく念う」ことは出来ない相談である。だからその私の内なる姿を十劫の昔から見てとって、私のかわりに、私のために一心正念になり切って下さった。「オネガヒダカラスグキテオクレヨ」このお言葉は、如来様が日本語になって私に呼びかけて下さった南無阿弥陀仏であると、その時感じたことを想い出します。

今日、この一心正念直来の先生の書を今度印刷しましたので皆様に一枚宛ご供養いたします、お持ち帰り下さい。先生の今のお話をその中に拝見し、胸に引き当てて体読、身読して下さるようお願いします。木村無相さんはお手紙で、一心正念直来は、そのまま南無阿弥陀仏と裏と表で一体であると、お知らせいただき、成程とお念仏の私への御呼び声を聞かされました。

さて法蔵菩薩が願いを建てられる時に、私の願いは私と同等以下の願いしか建立し得ないと考えられて、一切衆生を救う大願はどうしたらよいしいでしょうかと世自在王仏にお尋ねになると、「汝自ら知るべし」と仰言る。これに菩薩が「それは私の境界ではありません」とお答えすると、その志願の深広なことを見抜かれて、王仏が十方諸仏の浄土をあらわされると、それをことごとく観察されて、四十八願を建立され、それらがすべて南無阿弥陀仏という一名号に凝結完成されて、我等煩悩熾盛の地獄必定の凡夫の私に廻向して下さいました。このことを空想的な偶話に思われるかも知れませんが、例えば、只今ここで私に見える限界は、ここの天井の下だけで、天井の裏には何が潜むか、刀を持った人が私を刺そうとしているやら、宝物を与えようと思っている人なのやら、絶対私には不明です。そのように私の智慧以上のことは、猫に小判です。私の長男が生れた時、子守娘に親類から来てもらったが、十二三才の女の子です。或時、新聞を見て「おじさん心中して死んだって何のこと？」と聞きます。私はもっと大きくならんと解らないよ、と云いましたが、十二三の少女には、その年齢以下のことしか解らないのです。我々は我々と同等以下の知識で是非善悪、自分と他人の間で喜怒哀楽、彼奴が、此奴がと生きている。これはあたかも猫が自分の尻尾を自分

で追いかけていると同じで、尻尾は同じ速度で廻るから追いつけない、たとえ追いついて目的を達しても、それは自分の尻尾で、自分と同等か、それ以下のものです。私共は毎日これをやって、途中でやめることもある。真剣に追求したならば倒れて死ぬか、狂うかです。主義とか主張とか自我中心に絶叫しても私以上のものは出てこない。

池山先生が社会事業によって世の中を正しい善いものにしようと思い立たれた、組合という訳語も先生が始められたのです。そのために神田須田町で煙草屋（当時まだ民営であった）をはじめて苦学生を養成するなど種々苦心され、その後難病のために中断し、大阪に一時移って再起をはかられた。そうした時、近角先生と沢柳博士のお尽力で、岡山の高等学校のドイツ語の教授になられ、先生としては今までとちがって清閑な生活がはじまったのです。そこで先生御自身には大切な事業と思われても、世間がそれを認めてくれない、その淋しさから世間の眼のないことを責め、うらむ心がおこった。理想としては認めてくれなくてもよく忍んでやるべきなのに、名誉心にさまたげられてそれが出来ない、これというのも自分の内に真実の善を求める心はなく、名誉を願う心で一杯なのに気付かれて、煩悶懊悩の日が続き、四帖半の書斉にこもられて、噫、信心がほしいと、あたかも闇室で落したカフスボタンを探すような心地で、四つ匐いになって、光りは何処かと思いつめられた。その刹那に「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」の歎異抄二章の金言が胸に浮かび、そこの「親鸞」とあるのを「池山」と置きかえ、「よき人」とあるのを「親鸞聖人」とかえて「池山におきては、ただ念仏して弥陀にたすけまいらすべしと、よき人親鸞聖人の仰せをこうむりて……」と読みかえて、聖人もそうされたのか、じゃあ池山も、と、南無と唱えると、念仏は口をついて止めどなく流れ出て、何のことはない光の滝を浴びるようであったとお述べになりました。

時に先生四十二歳でありましたが、先生のお母堂が篤信な人でそのお育てを幼い時からうけていられ、又近角先生と親しくなられるに及び歎異抄を一緒に読まれるなどもしていられ、聖人に対する信頼は段々深まっていられたのでありました。こうして、他をばかり見る眼が、内心を見るようになられ、とうとう大煩悶の末に信心の花が開かれたのでありました。

さて私共は猫が己れの尻尾を追いかけるように、自我を中心にして他を征服しようにかかり果てています。しかしそれは、私と同じかそれ以下の世界を出ることしかできないで、はてしない生死の苦海に浮沈し方角さえも定められ

ぬ私に対して「汝」と呼びかけ「一心正念直来」（オネガヒダカラスグキテオクレヨ）との阿弥陀仏のみ声に、我のやまない私が「汝」として自覚され、弥陀大悲を仰ぐのであります。私以上の、天井裏から私の中に降りて来られて、「汝」と呼ばれる仏の光明、仏の大慈大悲におあいするのであります。

次ぎに**保木俊雄先生**のお話を誌します。

私は二年程前に、無自覚でしたが胃潰瘍で手術をしました時、丁度岡崎市の一道会がありましたが出席出来ませんでした。それ以来まだ調子が元へもどっていません。幸い今日は日頃の我儘をお知らせ頂こうと思ってまいりましたが、朝あまり調子がよくないので御無礼しようかと云いましたら、家内に、まあお参りになったら、と云われて参りました。私は念仏も喜ばず、病気にあまえてつまらぬ奴だなあ！何とか立上って先生方のお供をしたいと、こんな思いであります。今日は追憶会で、昔のことを振返えり、今日を出発点として大いに励みたい、思いをあらたにしたいと思うことであります。

昭和五年、今から五十年前、その時分の花田先生はびっくりするようなお念仏でした。この人こそが真の念仏者だと深い感銘を受けました。かっての岡崎一道会で、松本解雄師に、君は一番元気だ、長生するぞ、煙草は止めよと云われました。私はその時、あなたは毎朝一キロも走っているし、我々の中で一番元気だね、と申しましたが、その松本師が教え子の結婚式に出席せられて、バイオリンを演奏し終ると同時に倒れて亡くなられました。この松本師と花田先生と私などで大きな御縁が出来たわけです。

それは、京大の羽溪教授の主宰された知四明寮で私は大谷大学におりましたが、知四明会で日曜学校をはじめるのでと招かれて寮に入りました。そうした時、物凄い念仏の燃えあがりになりました。丁度昭和四年一月にはじめて信仰告白会を催されました。第二回目は晩に催されました。当時、信仰など告白出来るものではないと不審をもちましたが、何か心にひきつけられるものがありました。当日私は大学で寺本教授のチベット語の講義を受けていましたが、花田先生のお話がはじまる時間なので、先生に申出て、会場のお寺へ参りました。丁度先生のお話の最中でした。この会ができましたのも松本師の尽力によったものでした。師の寮内でのお念仏の生活にふれて、このお方こそ真の念仏行者だと骨身にしみて感じました。

会が終って、私は谷底へ突き落されたような気がしました。寮に帰る途中でうどんをたべることになっていたが、

食べどころでなく、私の心は真暗闇になり、思わず歎異抄を開きました。こうした時、同じ寮に居られた川畑愛義先生に導きをうけ、色々とお育てをいただきました。こうして如来のお心にそむいてばかりしている私が、仏のふところに抱きとられて、念仏が申されるようになり、寮の中を躍りあがってよろこびました。これを見た寮の秀才連中も非常な感動をうけたようであります。こんな次第で、京都の学生親鸞会が次第にさかんになって参りました。

あだかもよし、そうした時に池山榮吉先生が甲南高等学校から大谷大学の教授として来られました。そこで友達と一緒に先生のお宅を訪ねるようになり、先生のお話を最初にうけたまわったのは京都三条の鍵屋の二階でしたが、最初に「古池に蛙飛びこむ水のおと」の芭蕉の句を引かれて、古池には沼気がブツブツとあがるが、若い諸君の口からお念仏が浮かぶのを聞いて、そこには遠く古い御縁があると知らされた。この古い池にとびこんだ蛙がどちらに泳ぎますことやらと挨拶され、始終微笑をうかべられながら念仏裡のお話がありました。私は先生にドイツ語を教えられたのですが、黒板に何か書かれている間も念仏の声がもれていました。又廊下を歩かれながらも、お念仏の声が聞こえました、教員室に居られるときも静かにお念仏して居られ

その後、大阪に求道の集いが出来、池山先生にお願いして榊原師と私がお伴をしてまいりました。会場には船場の女店員や、府立医大の看護婦さん、さらに大丸の女店員など沢山の聴衆があり、やがてこれが大阪親鸞会と発展してまいりました。先生にお願いすると喜んで行って下さいました。私達は金がないので御礼ができず、せめて先生のお好きなロビンという煙草を二箱差上げるだけでした。京都の学生親鸞会にも度々先生の御講話をお願いしましたので多くの友人が先生のお育てをうけました。私は学校を卒えて南洋ダバオの東本願寺に赴任しましたので、先生の御往生にお会いできず残念に思って居ります。

現在私は満七十歳になり、友人は一人欠け、二人欠けてゆきました。こうして先生の追憶会におあいできましたが、これからも健康に注意して、立上って先生のお跡について行きたいと思います。先年、岡崎市の一道会で、西元先生と「一期一会で、この様な集いがいつまで続けられるであろうか」と話し合ったことでした。これは私のお願いでありますが、皆様方は先生方の御法味をお念仏一つにいただかれて、末永く伝えていただきたいと念じる次第であります。

念仏詩抄

木村無相

ハカライ

香師おおせに
〝これでも助かると
落ちついておるのが
ハカライじゃ——〟

落ちついても
落ちつかんでも
ハカライはハカライ
自分免許（めんきょ）じゃ
助からぬ——〟

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

香師＝香樹院徳龍師

ナムアミダブツ

おひき受け

香師おおせに
〝信得て喜ぶ身に
なれば
ナンギな娑婆が
楽になる——〟

娑婆のナンギに
かわりが無くも
アミダ如来が
おひき受け——

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

お慈悲によらねば

香師おおせに
〝仏法は
凡夫の耳に入りがたし
仏のお慈悲にて
聞くこと――〟

お慈悲によらねば
聞こえぬのなり
耳にはいりても
心にとどかぬ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ウタガイはれぬなら

香師おおせに
〝よく聞け〳〵
ウタガイはれぬなら
命がけにて聞けよと
おおせらるる――〟

聖人ご和讃に
〝たとい大千世界に
みてらん火をもすぎゆきて
仏の御名を聞く人は
ながく不退にかのうなり〟

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

転化の達人

香師おおせに
〝まことに
信を得たるうれしさは
死ぬる先きは安養の浄土
ふりかえり思うてみれば
地獄の罪人――
これを転じてかえたもう
ナムアミダブツは
甘露の味なり――〟

ナムアミダブツは
転化の達人

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

それからこそが

香師おおせに
〝すこし聞くと
はや聞いてしもうた
ような心になる
それを憍慢という〟

聞えたとは
聞く耳をもろうたこと
はや聞いてしもうた
どころか
そこからこそが
聴聞の新出発――

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ともしび

花田正夫

善財童子の求道に憶う

詩人は一葉落ちて天下の秋を知り、科学者ニュートンは落下するリンゴに眼に見えぬ地球引力を発見した。私どもの身辺にも心して見ればこうした事例が無数にあるが、悲しいことにはそれに驚く謙虚な心が欠けている。見るもの花にあらずということなし、といたるところに俳境の妙を見出した芭蕉が、旅に病みて夢は荒野をかけめぐりと詠じたのも心うたれることである。

幸いに私は、善財童子の合掌して五十三の知識をたずねて求道する絵を恩師からいただき、毎日床に掲げて心のともしびにしている。童子は最初に智慧の権化者の文殊菩薩の教えをうけて、自分のあさましい姿がうつし出され、その菩薩に護られて次々によき師を歴訪し、夫々に貴重な教えを身につけ、最後にはお妃や、お母君を善知識として、往生成仏の道を急いでいる。思うに真人は、順逆の両縁、善悪の業報、等々一切の事象を合掌して受け、そこに無尽の宝蔵を見いだし、うむことを知らぬ若々しい魂をもって求道の旅を続けるのである。

省みれば私は、煩悩に障えられた愚鈍の身であるが、いつでも、どこでも、たもちやすい慈悲の念仏に導かれ護られながら、幾山河を越えさせていただきながら、そこに無数の教えを恵まれるであろうことをおもうと、老いてなお心のはずむものがある。

（昭五四年四月一日）

聴聞を心にいれ申さば、お慈悲にて候間
信はうべきなり

（蓮如上人・聞書）

成道された釈尊が、慈眼をもって一切の衆生をみそなわし「奇なるかな、奇なるかな、一切衆生は一大蓮華池なり」と歎ぜられ、そこに青・白・紅の蓮華が、或は蕾を水中に生じ、或は水面に浮かべ、或は水上高く今や開かんとしているのを見いだされて、その蕾の開花のために生涯を打ちこんで下さったのである。

しかし煩悩に眼の覆われた私どもには、いたる所に、よごれ濁った、穢い世界としか思えないで、糞中の穢虫がその中で居を争うて、清らかな世界を知らないのと同様である。それをかねてしろしめす仏陀の慈心は火を燃えて、あらゆる善巧方便をめぐらして下さり、点滴が岩をもうがつように、頑固な私どもにも、やがてその真実心が徹到して、わが身の愚悪さをはげしく恥じ、広大な仏恩を謝しながら、仏界浄土への道が開かれるのである。

ここに私共にとって一番大切なことは、よき教えを耳から目から絶えずいただいて、心田にそのよき種を植えさせていただくことである。真実なものは消えることは決してなく、縁をまって、芽を出し、花をつけ、実を結ぶものである。

（昭五四年六月三日）

うしろ向き姿のお導き

世間一般の教えを読むと、教化者は立派な高い所に居られて、右よ左よと指導されるのが常である。しかし歎異抄に見る親鸞聖人は、何時でも仏様の方に向いていられ、永遠の求道者を拝する、私どもはその後ろ姿に接するのである。

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」とは、いつでも、何処でも、誰にでも繰返された常の仰せである。私のように、何か外から命令されると素直に従えないで、すぐ文句をつける人間でも、そうした親鸞聖人には反抗のしようがない。いつの間にかその仰せが自然に身にしみこんで、聖人に同化させられる。

しかし聖人は「親鸞弟子一人も持たず」とおっしゃる。経に「菩薩はことさらに人を教化しようとされないが、菩薩の修行される姿にふれて、人々は自然に帰順する」とあるが、弥陀仏が御廻向して下さる御念仏の御はたらきによって、聖人の上におのずとその徳光を拝する、あだかも、明月のかがやきがそのままに太陽の光の返照であるように。

（昭五四年八月五日）

表裏相応

秀存師

嫁がどうしても衣服を女中にたたませなんだのは、衣服の表は立派なれども、その裏が切れ切れの木綿であるのを他人に見られるのがいやなためなり。

実家に帰っては、これを脱ぎすてて置くのを、母のたたむにまかすことの出来るのは、母は裏も表もよく知って居るがためなり。

まだすべてをまかすことの出来ぬのは、大慈大悲の親縁を他人と思う故ならずや。

あとがき

二月は釈尊の涅槃会の月で、サラソウ樹の下に沢山の人々がお別れを悲しんでいる御絵像を中心に、夫々の行事がおこなわれております。更に二月はわが聖徳太子の御忌の月とて、当時の民衆は仕事も手につかず、親を失った子のようであったと記録されております。

世間のことはどんな親しい者も、離れるとうとんじ、遠ざかると忘れるのがその鉄則でありますのに、宗教的人格は、むしろこれに逆行してその余徳が時のたつにつれて地をうるおしてまいります。そこに世の親として追慕されるのであります。

こうした二月に、近角先生の、善知識の恩、の一頂をいただき、よき人々の恩徳を心あらたに味わせて頂きました。

又、池山先生が、大阪の学生を中心に歎異抄を讃仰せられた記録の「信を行く旅人」の中から、心に強くひびくものを抄出して掲げ、順を追うてお読み願うことにいたしました。

井上様は、仏力一つで人生手放し、と申す味いを頒って下さいました。トルストイは「太陽を探すのに、電灯も油灯もいらぬ。そうしたもので見出した太陽は熱も光もない偽せの太陽で、太陽は自らの持つ光で自らを明らかにする」と云って、智慧や才覚で探し出すことの非を誡めておりますのも思い併せました。

西元様は東奔西走、御仏縁を各地で結ばれておられる中に、お原稿を月々頂いております。蓬戸不出に近い生活をしております私には、何かと御力添えを頂いて居ります。

昨秋の京都の一道会の記録を、榊原師によりまして早々に頂きました。御寺族を挙げられての御苦労に支えられまして、会も年々さかんに、満堂となりました。とは申せ、一期一会の鉄則はきびしく、それだけに親しみも深いものがありました。ことに病気を押して出席下さった保木様には御礼の言葉もありません。また、井上様、中井様、村上様のお顔も見えましたが時間が足らず、お話を頂けませんで残念でありました。

木村さんは片眼の視力が弱まり、白内障の度も進まれたのですが、心臓の弱りもあって、しばらく手術は延期との由、年賀の返信も思うにまかせずとのことであります。

慈光　第三十二巻　第二号　昭和五十五年二月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可

〈御案内〉

○毎月第一、第三日曜、午后一時半、一道会例会。一道会館の南隣り、南区駈上町二の八六。鬼頭康彦氏宅。
市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角。
地下鉄、新端橋終点下車。

○教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四
毎月二十四日、午前・午後。
市バス、御器所通り。又は北山下車。
地下鉄、御器所通り下車。

○蓮光寺修道会。毎月七日午后一時半。
（但し日曜を除く）尾西市三条板倉
名鉄新一宮駅よりバス、西三条下車。

定価　半年　七〇〇円（送共）
一年　一四〇〇円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫
電話八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　坂部光雄
発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
振替口座　名古屋　一〇四七〇番
郵便番号　四五七